

「大韓見聞録」

1. はじめに

「朝鮮半島をめぐる東アジア情勢は、危機に瀕している。」このような風聞や言説が日本の世論を覆う状況は、何も今に始まってはいない。だが、北朝鮮の金正恩朝鮮労働党委員長の指示によるものと思われる、昨年2月の金正男暗殺事件や、相次ぐミサイル発射、核実験に関する報道など、日本にいながらテレビやSNSから受け取る朝鮮半島北部の情報は決して穏やかなものではない。一方、南部の韓国では、国民による弾劾デモが拡大し、時のパク・クネ大統領が最終的に罷免される事態に陥った。大統領選を経て選ばれたムン・ジェイン大統領は、北への融和姿勢を示す一方、いわゆる「従軍慰安婦」問題をめぐる日韓合意の再検証を断行するなど、日本への強硬姿勢を強めている。

朝鮮半島におけるこのような状況に対し、日本には、南北を安易に「朝鮮」と一括りにし、未だ残存する在日朝鮮人に対する差別意識とも相まって、「嫌韓」を煽る「専門家」や、これを声高に主張する世論が残念ながら一定数存在する。「憲法9条改正」を実現したい安倍政権は、その是非をめぐる日本国内の世論に加え、中韓など東アジア諸国との関係性の中で、難しいかじ取りを迫られている。

この度、私が留学先に韓国を選んだきっかけは、駒場時代に韓国朝鮮語を履修していた点や、韓国が距離的に日本から近く他の国に比べてアクセスしやすい点、知人が同時期に韓国への留学を考えていた点など、あげていけばきりが無い。だが、今回ソウル大学校への留学を決意した直接的な動機は、「自分の目と耳で直に見聞きし、考えたかった」というこの一点に尽きる。SNS上に情報が氾濫する昨今、根拠があいまいな噂や、憎悪に満ちた偏見がスマホの画面を覆う。安易に発せられる「ことば」には、先人たちがかつて大切にした「言霊」の欠片もない。もちろん、これらのツールを時に楽しみ、活用しながら生きている自分自身、そのような状況をむやみに嘆き、闇雲に批判するのは身勝手であろう。だからこそ、自分の目の前に広がる情景を、5感で知覚し、自分なりに状況を整理し、考えてみたかった。そのような思いで、この度、東京大学教養学部・ソウル大学校自由専攻学部・北京大学元培学院が提携する学部間交換留学プログラム「Campus Asia」に参加し、ソウルへと飛び立った。

2. 韓国での学び

(1) 韓国への「北」認識

①ミサイルについて

韓国の首都ソウルは、北緯 38 度線からわずか 40 キロほどしか離れていない。軍事境界線とは目と鼻の先のソウルではあるが、留学中に何度か遭遇した北朝鮮によるミサイル発射の当日も、何事もなかったかのように特に変わりはなく、終日穏やかであった。決して良いことではないが、韓国は、北朝鮮によるミサイル暴発や、小規模の軍事衝突に対して、すっかり慣れてしまっていた。言うなれば、我々日本人が、3・11 以降、震度 3 くらいの地震では何も感じなくなってしまった感覚に近い。「いちいち気にしては身が持たない。」

「気にしたところで、どうせ死ぬときは一瞬。」留学中に交流したソウル大生や先生方と様々な形で「北」のミサイルについて議論する機会があったが、先方は概してこのように語っていた。私が渡韓していた時期は、日本でちょうど J アラートが普及し、その都度警報が列島を覆い、政府やマスコミが神経をとがらせていた頃であった。それだけに、同じ朝鮮半島にいらざどこか楽観的な韓国人と、海を隔てて過剰に反応する日本人の様子がより対照的に映った。日本のマスコミや世論が「北」に過剰に反応しすぎている一方、韓国のマスコミや世論は慣れすぎている、というのが実状であるようだ。(その背後には、危機を煽って支持率を維持し総選挙を有利に進めたい安倍自民の思惑や、パニックを避けるべく情報をうまく制御したい韓国政府の思惑があるようにも感じなかったわけではないが。)

ところで、韓国では、11 月 15 日に歴代 2 位の規模と言われる大地震が起きた。震源地は韓国の南部であり、幸い私がいたソウルは 1 ミリも揺れることがなかったわけではあるが、この時は韓国中が大騒ぎになり、その影響は、開始前日であった「修能 (スヌン)」(日本で言うセンター試験) の実施が、急きょ一週間延期になるほどであった。もちろんこの地震自体の規模は改めて言うまでもなく大きいものではあったが、「北」のミサイル発射を屁とも思わない韓国の世論が、この時は火がついたかのように大騒ぎになったことは、私の中でも強く印象に残っている出来事であった。

②南北統一をめぐる議論

先述のミサイル問題を議論する際、「南北統一を望むか」という質問も併せて韓国の同世代の友人たちにしてみた。結果、「将来的には望むが、現時点では反対」という声が大多数を占めた。もし日本が現在、「フォッサマグナを境に東西に分裂して戦争状態にある」という想定の下にあったとしたら、私自身一人の日本人として、きっと列島の分断を嘆き、統一に向けた動きに貢献したいと考えるであろうと、私は当初想像していた。だが、彼らの話を聴くうちに、その想定は必ずしも現代の朝鮮半島の情勢を再現していないということを認識させられた。まず、現代の韓国人、とりわけ若者たちは、朝鮮半島が統一されていた状況を知らないため、統一を「したい」か「したくない」か、ではなく、統一の必要が「ある」か「ない」かで、この問題に対峙していた。分断された状況が長期化し、同じ民族であるとはいえ、南北で言葉や文化に差異が多い状況が「あたりまえ」になった朝鮮半島の現状下で、世代が若くなるほど、北朝鮮に対する民族的な同朋意識や、統一に対する意欲が薄くなって

いるように感じた。あるソウル大生が南北関係について、「(多少の語弊はあるが、民族的な観点での) 韓国と北朝鮮(北朝鮮)の関係は、アメリカとカナダの関係に近い。アメリカもカナダも似た者同士だけれども、だからと言って統一しようという動きにはならない。現在の半島もそれと似たような関係だ。」と私に説明してくれて、私はその時、妙に納得した。

また、南北の統一をめぐる議論をしていく中で、韓国人と在日朝鮮人との間でも温度差があることに気づかされた。駒場時代に韓国朝鮮語を第二外国語として履修していたこともあって、他の東大生に比べて、当時のクラスの同期や後輩を含め、在日朝鮮人と呼ばれる人たちと接する機会に私は恵まれていた。私が交流している在日朝鮮人の友人たちの中には、統一を「民族の悲願」とし、強く希求する者が多い。その背景には、彼らの両親や祖父母やもっと上の世代、すなわち、南北が分断する以前の朝鮮半島を知っている世代の認識や祖国へのノスタルジーが、世代を超えてそのまま語り継がれ、若い世代にまで定着している一面があるようだ。こちらの場合は、年齢が若くなるほど、上の世代の夢を受け継ぐ形で、未だ見ぬ故国の統一を求める声が大きくなっているように私は感じる。

③社会主義・共産主義に対する認識

韓国は、「社会主義」「共産主義」という概念にかなり敏感な国であった。その背景には、言わずと知れた、北朝鮮という社会主義国家と隣接しており、未だ対立関係にあることに由来する。韓国では、社会主義・共産主義を標榜する政党・政治団体の結成や活動が禁止されている。その過敏さは学問の領域にまで及んでおり、軍事政権の時代から民主化へと移行した1980年代までは、社会主義や共産主義に関する研究自体がかなり制限されていた。後に詳細を記すが、このような背景から、韓国における社会主義・共産主義に関する学問領域には、依然として検討の余地が残されていると考えるに至り、私は近代朝鮮の社会主義の勃興に興味を持つようになった。

ちなみに、現在のムン・ジェイン大統領が日本では「リベラル派」として報道されているが、韓国人に言わせれば、それはあくまで韓国内でもタカ派で知られていたパク・クネ前政権と比べて穏健であるという意味であり、決してムン政権が「左派」政権であるというわけではないらしい。韓国の政治思想の物差しには、「中道より左」が原則的には存在しないということは、韓国の現代政治を考えるうえで改めて認識しておく必要があるようだ。

(2) 対日意識

①安倍自民政権について

留学中、日本での総選挙の実施と安倍自民の大勝を、韓国のメディアを通じて知った。韓国では、安倍首相の政治色が歴代政権の中でも「タカ派」であることを念頭に、安倍政権があたかもかつての軍国主義政権の再来であるかのように報道されていた。というのも、安倍首相がテレビに登場するときには、日章旗が背景に映され、厳かに行進する自衛隊を閲兵する首相の様子が頻繁にテレビで映されていた。その様子は、日本人である私にも安倍首相の

「過激派」としての印象を感じさせるほど強烈であり、まして韓国人には恐怖心すら芽生えさせるものであるだろうと私は感じた。総選挙での安倍自民の大勝は、韓国の主要メディアを通じて大々的に報道され、その後の政権の動向や、日本の憲法改正については、韓国でも注目されている。

②改憲・自衛隊について

秋の総選挙以降、日本では、改めて憲法改正に向けた議論が政府・与党を中心に本格化していることが報道されている。改憲に向けた議論の動向や日本の世論については、韓国でも随時報道されており、韓国の世論も関心を寄せていた。

日本で憲法改正の議論がなされる際は、「米国主導の対外戦争に日本・自衛隊が巻き込まれるか」ということが、しばしば論点の核となり、日本国民の関心を集めているように感じるが、日本の改憲をめぐる議論に関する捉え方が、韓国では、日本と少し異なっているように私は感じた。というのも、韓国では、日本で改憲が進み、自衛隊の権能が強化されることで、「日本の『軍隊』が再び韓半島（朝鮮半島）に進出・駐留すること」が強く懸念されている。近代日本が帝国主義を掲げ、朝鮮半島に侵略・進出した歴史が「民族のトラウマ」として未だに彼らの脳裏に根強く残存している中で、「軍隊」と認識されている日本の自衛隊の存在が、戦後70年以上経過した今もなお、韓国において十分に理解されていないことが、そのような韓国世論の背景にあるようだ。実務レベルにおいて、「日米」や「米韓」の枠組みでの合同演習は頻繁に行われているものの、依然「日米韓」の三か国での連携がうまく取れていないことも、それを裏付けているようである。『北』への脅威に備えて、日本との連携を強化したいが、たとえ後方支援であっても、日本の『軍隊』を韓半島に上陸させることは勘弁だ」という韓国側のジレンマをここに感じずにはいられない。

あるソウル大生から、憲法改正に関わるような重大な議論を「解釈論」で決着させようとした安倍政権について、「法治主義の根幹である憲法の運用を、一政権が『解釈』で変更できるのか」「まずは改正をしてから内容を検討するというのが、筋ではないのか」という鋭い質問・指摘を受けた。その際、私は、現行制度下における自衛隊の特異性や、それに対峙してきた時々の政権の葛藤、安全保障など国家の重大事項に関する議論への司法の不関与など、日本独自の事情を随時説明したわけではあるが、国家の根幹である憲法やそれをめぐる諸制度の歪曲性や限界を外国人に指摘され、一人の日本人大学生として改めて改憲について考えさせられた。

②日本文化への認識

「同世代の韓国人は、日本人が韓国のことを知っている以上に、日本のことをよく知っている」と、私は感じた。確証や確かなデータがあるわけではないが、そう感じるに至った要因はいくつかある。まず、韓国には「日本」を感じさせるものが多く普及していた。街中には、すし屋やとんかつ屋、ラーメン

軍艦島見学プログラム打ち上げ。チャ教授夫人を囲んで。

屋、うどん屋など日本食のお店が多く立ち並んでいる。韓国の学生が使う文具のなかで、日本製のは段違いの人気を誇っている。昨今、日本国内でも人気のあるアニメは、海を越え、韓国でも支持を集めている。政治状況に関わらず、韓国の若者は日本文化が好きなのである。韓国の文化や生活に「日本」が見え隠れする背景には、植民地時代の名残もあるのだろうが、政治的な関係性にあまり左右されることなく、今もなお日本の文化が積極的に韓国で受容されている背景には、韓国の現代の教育制度が影響しているのではないかと私は考える。我々、日本で教育を受けた者たちは、海外生活の経験がある帰国子女など、特別な事情をもつ者を除き、大学に入学するまでの中高の間に、英語以外の外国語に触れる機会にはほぼない。だが、韓国の場合は、中高の間に、英語以外に日本語か中国語を選択科目に課している学校が多く、多くの学生は大学に入学までの間に、これらの言語に触れる機会が用意されている。これがきっかけとなって、日本や中国などの隣国の文化に興味を持つようになったものが、特に若者世代には多くいた。「どうしてそんなに日本に詳しいのか？」とこちらが質問を投げかけた際、「中高の時に日本語を少し勉強していたから、それがきっかけになって…。」と答える学生が多くいた。言語習得は異文化理解の大きな契機の一つになりうる。まして、遠い国ではなく、隣国の言葉ともなれば、使用頻度も多く、実用性が高い。日本でも同様に、多感な中高の間に、若者が中韓などの隣国の言語に触れる機会が少しでも増えれば、互いを理解するきっかけが増し、良いのではないかと私は考えた。

(3) ソウル大学校での日々

①言語教育院での韓国語講義

留学中は、平日の午前9時から午後1時までの毎日4時間、ソウル大付属の言語教育院で、韓国語の講義を履修した。講義自体の規模は10人前後の少人数形式で、どのクラスも全体的に中国人留学生が過半数を占めていたことが特に印象的であった。私が参加していた講座は日常会話ができるようになる程度のレベルのものであったため、私自身が韓国の新聞や学術論文を読むに至るまでは、これからもさらなる研鑽を積みねばならないわけではあるが、講義を履修したことで、韓国語の能力は、帰国するころには、現地で生活するには困らない程度にまで上達した。週末の夜は、クラスの学友たちとソウル大付近の居酒屋でお酒を飲んで談笑したり、カラオケに行っているいろいろな国の歌を歌ったりと、楽しい日々を過ごした。

②日韓歴史教科書の検証

交換留学プログラム「Campus Asia」の必修科目の一つであった「自律研究」で、私はソウル大の学生と共に、日韓の間に横たわる歴史教科書問題や歴史認識問題に取り組んだ。尚、これに関する詳細は、後日提出予定のレポートに記載したので、ここでは概要のみに触れておく。

歴史認識問題を解決させ、日韓の友好関係を強化しようとする試みは、何も我々の取り組

みに始まったものではなかった。過去には日韓両政府のバックアップのもとで、二度にわたる「日韓歴史共同研究」が実施された。だが、このような、政府や世論の支持や影響を受けた公式の取り組みでは、研究を実施する上での最高の環境や、人材の質がある程度担保されている一方で、これらが実証的な研究、「学問の自由」を阻害する足かせともなりうるのである。

そこで今回、私たちのグループは、日韓両国で実際に使用されている高校の主要教科書を用いながら、歴史の授業を受ける生徒の側に立ちつつ、学生という「しがらみ」のない自由な立場から、日韓で語られる歴史事実やその語られ方の差異について、ありのまま比較・検討をし、次世代で共有されるべき「東アジア」という枠組みに、新たな一石を投じようと試みた。

研究の内容については、お互いにコミュニケーションを密にとりあいながら、グループとしても良いものに仕上がったと自負している。また、グループ発表では他のグループからも高い評価を受け、指導教官であった自由専攻学部のキム・ボムス教授からも最高の成績を頂いたこともあり、大変満足のいくものとなった。

③植民地朝鮮における社会主義の勃興と普及

朝鮮半島で展開された独立運動のなかに、「抗日」・「独立」という以外に、「社会主義」を標榜する一面があったということは、日本ではあまり知られていない。

日本では、明治維新以来、欧米由来の資本主義が浸透した明治後期から、社会主義運動や労働運動が盛り上がりを見せ、その時々政権はその対応に追われた。近代日本における社会主義の盛衰の様相は、日本史の高校教科書でも詳細に説明されている。日本での社会主義をめぐる歴史的な経緯を踏まえて、大日本帝国の支配下にあった近代朝鮮でも、内地の政治的・思想的な影響を受けて社会主義が勃興し、民衆階層に浸透するに至る一連の様相は、少し考えてみれば、当然の流れであるといっても問題はないだろう。だが、その実情については、日韓両国の間でこれまであまり検証されてこなかった。その背景には以下の理由があげられる。

日本は、朝鮮半島を支配した側であることもあって、「統監府」や「朝鮮総督府」が歴史叙述の主体に位置し、当時の国外及び内地の情勢に配慮しつつ、被支配者である朝鮮民衆とどのように対峙したかという構造で、しばしば歴史が語られる。朝鮮民衆による独立運動やゲリラ活動に関しては、基礎的な表層しか扱われない。我々日本における歴史学習者は、植民地時代の朝鮮半島において社会主義が勃興した事実や、朝鮮で社会主義運動が抗日運動とときに協力、またときに対立しながら、拮抗したといった、独立運動そのものの特性や内実に関する詳細について、ほとんど知る由がない。検証をする以前に、そういった事実そのものが日本で共有されていないというのが実状である。

一方、韓国では、植民地時代に社会主義が隆盛したということは、半ば自明のこととして認識されているため、かえってこれに関する研究が、これまでにあまりなされてこなかった

という事情がある。また、先ほど述べた通り、現在も同じ半島に「北朝鮮」という、韓国と現在も対立する社会主義国家が存在しているため、社会主義そのものは「タブー」とみなされ、取り扱いがいまだにナーバスな状態であるという政治事情から、韓国では、社会主義に関する研究が近年まであまり積極的になされてこなかったという事情もこれに大きく関連していると言えるだろう。

植民地朝鮮において社会主義が勃興したことや、これが抗日運動という、一見性格を全く異にする運動と相互に影響を及ぼしあいながら、「独立」という共通目標の下で共存・共栄した奇妙な構造について、私は留学期間中にソウル大で学んだ。

日韓とも朝鮮半島の植民地時代は、幸か不幸か同じ歴史を共有しているにもかかわらず、近代朝鮮における社会主義の勃興・浸透というテーマについては、全く異なる背景から研究があまり進んでいない。この状況を認識したうえで、今後とも研究を深める余地のある、植民地朝鮮における社会主義と独立運動の関係性について、私は興味を持ち、今後控えている卒業論文も念頭に、留学中に独自で調査を進めた。

3. 留学を終えて

一学期・半年弱の留学生活は、言葉通りあっという間に終わってしまった。だが、留学中は、日本にいる頃よりも時間に余裕があったため、これまでの自分の歩みや、これからの進路について考え、自分自身とじっくりと向き合う時間が、日本にいる時よりも十分あった。

留学生活を通して、対話・コミュニケーションの大切さを身に染みて感じた。日本で培った常識が、海外では「非」常識であることが多々あった。またその逆もまたしかりである。コミュニケーションを取り続けながら、自分の持ち合わせる常識や「当たり前」を、現地の風土とすり合わせながら馴染ませていく。そうして互いの差異を埋めていった延長線上に、相互理解というゴールが待っているように私は感じた。

留学中は、日本には会えないような方々にお会いすることができなかった。ソウル大では、「Campus Asia」の指導教授であったキム・ボムス教授や、東洋史学科のパク・フン教授、国史学科の洪宗郁副教授にご指導いただいた。また、東大名誉教授の渡辺浩先生にもお会いし、研究に関するアドバイスをいただいた。いずれの先生方も東京大学に縁があり、日本史学研究室で近代史を学んでいる旨を一言お伝えしただけで、盛大にもてなして下さり、親切なご指導を頂いた。韓国では、私の指導教官である加藤陽子先生や鈴木淳先生、本プログラム執行委員長長の月脚達彦先生のご高名や、東大が今日まで培ってきた伝統や「凄み」に触れることが多く、自分が身を置く環境がいかに贅沢なものであるかを、海外にいながら改めて身をもって体感した。ソウル東大会では、長嶺安政大使を筆頭に、韓国で活躍する東大の先輩方とお会いし、お酒を飲みながら談笑することがかない、良い刺激を多く頂いた。

軍国主義下の日本が「大東亜共栄圏」の理想を掲げたり、最近だと鳩山由紀夫元首相が「東アジア共同体」という構想を主張していたりと、これまでに「東アジア」という枠組みで、政治・経済・外交・社会問題などを捉える考え方は、それぞれの時代ごとに提唱されてはき

だが、理想と現実との極度の乖離や、各国の足並みの不揃いにより、挫折を繰り返してきた。だが、「東アジア」という枠組みをもって物事を捉えるという思考は、グローバル化が進展した現代において、いつにも増して必要不可欠な概念となっているといっても過言ではないだろう。

日中韓の間には今でも様々な差異が存在する。だが一方で、我々「東アジア人」は「はし」を使う文化を共有している。様々な対立や隔たりを乗り越えるべく、「箸」を使うもの同志で知恵を出し合い、未来の東アジアを架ける「橋」となる。これを、風雲急を告げる東アジア情勢下で、あえてこの時期に韓国に留学した自分自身の今後の使命とし、ソウルで得た貴重な発見や学習をもとに、これからも最高の研究室で最高の先生方のお力も拝借しながら精一杯学び、吸収し、挑戦し続け、残りの大学生活を充実したものにしていきたい。